臨　床　医　学

内科学講座

消化器・肝臓内科

教　授：田尻　久雄　　消化器病学（消化管・膵臓）
教　授：伊坪真理子　　消化器病学（肝臓）
教　授：銭谷　幹男　　消化器病学（肝臓）
教　授：大草　敏史　　消化器病学（肝臓）
教　授：髙木　一郎　　消化器病学（胆道・肝臓・膵臓）
教　授：相澤　良夫　　消化器病学（肝臓）
教　授：西野　博一　　消化器病学（消化管・膵臓）
准教授：中島　尚登　　消化器病学（肝臓）
准教授：小井戸薫雄　　消化器病学（消化管）
講　師：石川　智久　　消化器病学（肝臓）
講　師：穂苅　厚史　　消化器病学（肝臓）
講　師：松岡　美佳　　消化器病学（消化管）
講　師：小池　和彦　　消化器病学（肝臓）
講　師：瀬嵐　康之　　消化器病学（肝臓）
講　師：須藤　　訓　　消化器病学（消化管）
講　師：宮川　佳也　　消化器病学（消化管）
講　師：國安　祐史　　消化器病学（肝臓）

教育・研究概要

Ⅰ．消化管に関する研究

TL1A の産生は，クローン病（CD）において 1 つの重要な調節因子と考えられている。免疫複合体により誘導される TL1A は，TLR8 リガンドもしくは TLR7/8 リガンドにより強力に抑制されることを示した。さらに TL1A の産生を抑制し，その結果，CD4 陽性 T 細胞により産生される IFN-γ も完全に抑制することが判明した。TLR8 の活性化は CD の標的治療の重要かつ新たな経路となる可能性が示唆された。また炎症性腸疾患患者の寛解維持に n-3 系多価不飽和脂肪酸食品交換表による食事療法は有効であることを明らかにした。ある種の腸内細菌は樹状細胞の CRH 分泌を促進することを明らかにした。

Frequency Scale のアンケートを用いて，胃食道逆流症の症状改善と QOL との相関関係を分析した結果，自覚症状がより悪いほど QOL はより低下していた。さらにより強い運動障害の症状を治療前に認めるものは，proton-pump inhibitor（PPI）治療による QOL の改善率が高かった。PPI の有効性は，治療前の自覚症状の強さと関係すると考えられた。

人間ドックを受診した 1,335 名を対象に Frequency Scale for Symptoms of GERD（FSSG）を用いて GERD の評価を行った。346 名（25.9%）が GERD と診断され，FSSG の感受性は 34.7%，特異度は 72.7%であった。若年，アルコール過摂取，肝機能低下は GERD の予知因子となりうることが示唆された。Rabeprazole 20mg X 4 週＋10mg X 8 週の治療で FSSG スコアは有意に低下した。FSSG は GERD の診断や治療効果の評価に有用であると考えられた。

食道表在癌の治療において外科的治療前に的確にリンパ節転移危険因子を検索する事は重要である。外科手術例 110 病変を対象として検討した結果，リンパ節転移を 37 例（33.6%）に認めた。特殊染色（D2-4，elastica-Van-Gieson，CD31，CD34）を用いて脈管侵襲評価を行い他のリンパ節転移危険因子と共に統計解析を行ったところ，特殊染色を用いた脈管侵襲評価が最も強いリンパ節転移危険因子であり，その NPV は 94.6%と高値であった。

Ⅱ．肝臓に関する研究

免疫応答を制御する $CD4^+$ 制御性 T 細胞（Treg）を解析し，肝疾患の進行度と Treg の変化，肝細胞癌患者の末梢で誘導される adaptive Treg と発癌や初期の癌発育との関連を明らかにした。また C 型肝炎ウイルスの動態と関連の深いリポ蛋白代謝を解析し，特に血中 ApoB が抗ウイルス療法の治療反応性に大きく関与することを明らかにした。

自己免疫性肝炎（AIH）において病理学的病勢と病期，年齢，血液生化学検査値，自己抗体との関連について検討した。免疫性抑制治療により血液生化学的に肝機能正常化症例においても，生検により病期病勢の把握が重要であることを明らかにした。

睡眠時無呼吸症候群（SAS）では，約 20%症例で肝機能障害を認め，さらにその多くの症例が肥満，高脂血症に加え，耐糖能障害も合併している。低酸素環境での肝における代謝不均衡の特徴と SAS 重症度との関連性について検討した結果，γ-GTP との高度相関を認めた。NAFLD（non alcoholic fatty liver disease）との類似した病態も示唆された。

自己免疫性肝炎の病態における，NKT 細胞と樹状細胞の関与についてモデルマウスにおいて検討した。肝炎極期において，肝内 IFN-γ 産生性の活性化 NKT 細胞の増加が見られた。AIH 発症において，

NKT 細胞が病態形成において深く関与していることが示唆された。

マウス由来の培養幹細胞を用いて，幹細胞マーカーであるジングファインガー蛋白質 sall4 による肝/胆管細胞への分化制御機構の検討を行った。Sall4 が肝細胞への分化を抑制し胆管細胞への分化を促進し，肝幹・前駆細胞の二方向性分化決定に関与することが明らかになった。

栄養介入（NS）に際して，栄養評価を食物摂取頻度調査（food frequency questionnaire）と間接カロリーメーターを用いて評価した。また栄養学的不均衡と病態との関係を検討している。65％の肝硬変症例において，蛋白過剰摂取が明らかになった。NS において個々症例での栄養評価の必要性が確認された。

肝線維化進展や血管新生に関与する多機能ペプチドである CTGF（connective tissue growth factor）が肝線維化マーカーとして応用可能かどうかについて検討した。慢性肝炎症例に比し，肝硬変症例において有意に高値となり，組織学的線維化との相関が明らかになった。

ビタミン A エステル化酵素 LRAT とレチノール結合蛋白 CRBP-1 の共発現星細胞は障害肝における門脈域の線維化に寄与することを証明した。

健診における NASH（non alcoholic steatohepatitis）の早期抽出のために，肝障害の特徴の分析に加え，身体計測，インスリン耐性について検討を行った。空腹時血糖が正常症例においても，インスリン耐性を認める肥満症例では高率に肝脂肪化と肝障害を合併することが確認された。

肝細胞癌（HCC）の画像診断における MRI 有効性について，Gd-EOB-DTPA 使用による造影 MRI 画像所見と予後を含めた臨床的解析を実施している。この造影の約 80％ MRI 所見は，肝動脈造影所見と一致した。非侵襲的な EOB-MRI は有効な方法であることが確認された。

また多血性肝細胞癌の画像診断能について，CTHA・CTAP との比較より造影剤を用いず放射線被曝のない MRI 拡散強調画像の有用性を明らかにした。非 B 非 C 肝細胞癌の背景の特徴として，アルコール多飲と糖尿病合併が高率であることを示した。

ヒトの糖代謝を ^{13}C-glucose 呼気試験で評価するため，健常人に ^{13}C-glucose を投与し，呼気中の $^{13}CO_2$ の動態を検討した。健常若年女性の肝臓糖代謝は健常男性より亢進していることが示唆された。

TGF-β のアンカー蛋白は組織のプロテアーゼで切断される。その切断面を特異的に認識する抗体を用いて，血液中のアンカー蛋白断片量を計測することで TGF-β 活性化反応を定量的に測定する ELISA を開発し，肝障害患者血漿 500 サンプルを測定した。ペグインターフェロン・リバビリン併用療法で経時的に検討したところ，有意な低下が観察された。

Ⅲ．膵疾患に関する研究

WT1 ペプチドワクチンと塩酸ゲムシタビンの併用療法を進行膵癌に対して実施し，良好な成績を得ている。今後，新たな治療戦略となる可能性がある。

健常人での成分栄養剤投与は血中コレシストキニンやセクレチンの上昇を惹起しない結果より，特に重症急性膵炎回復期症例に対して検討を行った。自己免疫性膵炎 16 症例による各国診断基準の妥当性と国際診断基準作成に向けての研究を行った。

「点検・評価」

平成 21 年度は，原著論文計 67 編，総説 29 編，著書 9 冊，その他 40 編，学会発表は 94 件であり，研究業績は年々伸びてきている。国内外の研究施設ならびに学内の基礎医学講座との translational research の成果がでており，今後さらに進展させていく予定である。

消化器・肝臓内科の外来・病棟における診療実績数は病院内で常に上位であり，日常診療がきわめて多忙ななか，スタッフの診療と研究のバランスをとることが大学病院に勤務する医師にとって重要な課題である。毎週火曜日に行う症例検討会，総回診のほかに，研究グループごとに研究発表会ならびに画像カンファランスを定期的に実施している。また，３年前より実施している内視鏡部との人事相互交流が円滑に推移している。大学病院のもっとも重要な使命のひとつは次世代を担う若者の教育であり，当科では常に卒前・卒後教育の充実にとくに力を入れており，学生ならびに研修医からの評価はきわめて高い。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）Takikawa S, Engle RE, Faulk KN, Emerson SU, Purcell RH, Bukh J. Molecular evolution of GB virus B hepatitis virus during acute resolving and persistent infections in experimentally infected tamarins. J Gen Virol 2010 ; 91（Pt 3）: 727-33. Epub 2009 Nov 11.

2）Ohkusa T, Koto K, Terao S, Chiba T, Maba K, Murakami K, Mizokami Y, Sugiyama T, Yanaka A,

Takeuchi Y, Yamato S, Yokoyama T, Okayasu I ,Watanabe S, Tajiri H, Sato N. Newly developed antibiotic combination therapy for ulcerative colitis: a double-blind placebo-controlled multicenter trial. Am J Gastroenterol 2010 ; 105(8) : 1820-9. Epub 2010 Mar 9.

3) Aihara H, Sumiyama K, Saito S, Tajiri H, Ikegami M. Numerical analysis of the autofluorescence intensity of neoplastic AND non-neoplastic colorectal lesions using a novel. Gastrointest Endosc 2009 ; 69(3 Pt 2) : 726-33.

4) Muto M, Minashi K, Yano T, Saito Y, Oda I, Nonaka S, Omori T, Sugiura H, Goda K, Kaise M, Inoue H, Ishikawa H, Ochiai A, Shimoda T, Watanabe H, Tajiri H, Saito D. Early detection of superficial squamous cell carcinoma in the head and neck region and esophagus by narrow band imaging : a multicenter randomized controlled trial. J Clin Oncol 2010 ; 28(9) : 1566-72.

5) Goda K, Tajiri H, Ikegami M, Yoshida Y, Yoshimura N, Kato M, Sumiyama K, Imazu H, Matsuda K, Kaise M, Kato T, Omar S. Magnifying endoscopy with narrow band imaging for predicting the invasion depth of superficial esophageal squamous cell carcinoma. Dis Esophagus 2009 ; 22(5) : 453-60.

6) Aizawa M, Tsubota A, Fujise K, Kato T, Sakamoto M, Ohkusa T, Tajiri H. Highly active antiretroviral therapy improved persistent lamivudine-resistant viremia in acute hepatitis B virus genotype Ae infection with coinfection of human immunodeficiency virus. Hepatol Res 2010 ; 40(2) : 229-35.

7) Saeki C, Nakano M, Takahashi H, Saito S, Homma S, Tajiri H, Zeniiya M. Accumulation of functional regulatory T cell in actively inflamed liver in mouse dendritic cell-based autoimmune hepatic inflammation. Clin Immunol 2010 ; 135(1) : 156-66. Epub 2010 Jan 15.

8) Matsudaira H, Asakura T, Aoki K, Searashi Y, Mtsuura T, Nakajima H, Tajiri H, Ohkawa K. Terget chemotherapy of anti-CD147 antibody-labeled liposome encapsulated GSH-DXR conjugate on CD147 highly expressed carcinoma cells. Int J Oncol 2010 ; 36(1) : 77-83.

9) Imazu H, Uchiyama Y, Kakutani H, Ikeda K, Sumiyama K, Kaise M, Omar S, Ang TL, Tajiri H. A prospective comparison of EUS-guided FNA using 25-gauge and 22-gauge needles. Gastroenterol Res Pract 2009 ; 2009 : 546390.

10) Yoshizawa K, Abe H, Kubo Y, Kitahara T, Aizawa R, Matsuoka M, Aizawa Y. Expansion of CD4 (+) CD25 (+)FoxP3 (+) regulatory T cells in hepatitis C virus − related chronic hepatitis, cirrhosis and hepatocellular carcinoma. Hepatol Res 2010 ; 40(2) : 179-87.

11) Toyoizumi H, Kaise M, Arakawa H, Yonezawa J, Yoshida Y, Kato M, Yoshimura N, Goda K, Tajiri H. Ultrathin endoscopy versus high-resolition endoscopy for diagnosing superficial gastric neoplasia. Gastrointest Endosc 2009 ; 70(2) : 240-5.

12) Ohkusa T, Yoshida T, Sato N, Watanabe S, Tajiri H, Okayasu I. Commensal bacteria can enter colonic epithelial cells and induce proinflammatory cytokine secretion: a possible pathogenic mechanism of ulcerative colitis. J Med Microbiol 2009 ; 58(Pt 5) : 535-45.

13) Yoshida Y, Goda K, Tajiri H, Urashima M, Yoshimura N, Kato T. Assessment of novel endoscopic techniques for visualizing superficial esophageal squamous cell carcinoma: autofluorescence and narrow-band imaging. Dis Esophagus 2009 ; 22(5) : 439-46.

14) Imazu H, Sumiyama K, Ikeda K, Uchiyama Y, Kakutani H, Kaise M, Kaise M, Ang TL, Omal S, Tajiri H. A pilot study of EUS-guided hot saline injection for induction of pancreatic tissue necrosis. Endoscopy 2009 ; 41(7) : 598-602.

15) Yamane T, Uchiyama K, Ishii T, Ishii H, Takizawa R, Omura M, Fujise K, Tajiri H. Refractory diverticular colitis with progressive ulcerative colitis-like changes extending to the rectum. Dig Endosc 2009 ; 21(3) : 188-91.

16) Rey JF, Tanaka S, Lambert R, Tajiri H. Evaluation of the clinical outcomes associated with EXERA Ⅱ and LUCERA endscopy. Dig Endosc 2009 ; 21(Suppl 1) : S113-20.

17) Aihara H, Saito S, Arakawa H, Imazau H, Omar S, Kaise M, Tajiri H. Comparison of two sodium phosphate tablet-based regimens and a polyethylene glycol regime for colon cleansing prior to colonoscopy : a randomized prospective pilot study. Int J Colorectal Dis 2009 ; 24(9) : 1023-30.

18) Sumiyama K, Tajiri H, Kato F, Imura T, Ono K, Ikeda K, Imazu H, Gostout CJ. Pilot study for in vivo cellular imaging of the muscularis prppria and ex vivo molecular imaging of myenteric neurons (with video). Gastrointest Endosc 2009 ; 69(6) : 1129-34.

19) Kaise K, Kato M,Urasima M, Arai Y, Kaneyama H, Kanzazawa Y, Yonezawa J, Yoshida Y, Yoshimura N, Yamazaki T, Goda K, Imazu H, Arakawa H, Mochizuki K, Tajiri H. Magnifying endoscopy combined

with narrow-band imaginig for differential diagosis of superficial depressed gastric lesions. Endoscopy 2009；41(4)：310-5.

20）小林裕彦，池上雅博，三戸部慈実，浦島充佳．大腸粘膜下層浸潤癌のリンパ節転移危険因子の検討．慈恵医大誌 2009；124(3)：113-26.

21）石井宏則，池上雅博，小林裕彦，三戸部慈実，鈴木麻予，浦島充佳．大腸粘膜下層浸潤癌のリンパ節転移危険因子の検討　とくに脈管侵襲と簇出（budding）の比較検討．慈恵医大誌 2010；125(1)：19-32.

22）木下晃吉，石川智久，銭谷幹夫，田尻久雄．自己免疫性肝炎の病期病勢診断における腹腔鏡の有用性．Gastroenterol Endosc 2010；52(1)：28-37.

23）小池和彦，田尻久雄，伊坪真理子．肝細胞癌画像診断における MRI 拡散強調画像の有用性．肝臓 2009；50(12)：703-10.

24）島田紀朋[1)]，吉澤　海，井家麻紀子[1)]，土橋　昭[1)]，外山靖展[1)]，野村直人[1)]，戸田剛太郎[1)]（[1]新松戸中央総合病院），坪田昭人，安部　宏，相澤良夫．Genotype 1b・高ウイルス量の C 型慢性肝炎に対する response-guided therapy の検討．肝臓 2009；50(12)：687-702.

Ⅱ．総　　説

1）Kato T, Odagi I, Tajiri H. Comparison of confocal endomicroscopy and immunohistochemical localization of fluorescein in biopsy specimens in patients with large intestinal neoplasms. Jikeikai Med J 2009；56(3)：37-42.

2）有廣誠二，加藤智弘，田尻久雄．【小腸・大腸疾患診断のめざましい進歩】大腸　大腸疾患診断のコツ　大腸炎症性腸疾患の診断．臨と研 2009；86(11)：1508-13.

3）田尻久雄，丹羽寛文．内視鏡観察法の分類と定義．Gastroenterol Endosc 2009；58(8)：1677-85.

4）荒川廣志，貝瀬　満，斉藤彰一，今津博雄，加藤智弘，田尻久雄．【消化管出血　最近の話題】抗凝固薬・抗血小板薬使用者の内視鏡検査・治療．臨消内科 2009；24(8)：1101-12.

5）斎藤彰一，相原弘之，二上敏樹，荒川廣志，田尻久雄，池上雅博．【特殊光観察による内視鏡診断の最前線に迫る！】大腸腫瘍性病変の診断における AFI，NBI の有用性を検討する．G.I. Res 2009；17(3)：241-8.

6）今津博雄，田尻久雄．【がん診療 update】がんの診断　内視鏡．日医師会誌 2009；138（特別 1）：S115-6.

7）今津博雄，松永和大，池田圭一，角谷　宏，加藤智弘，貝瀬　満，田尻久雄．【胆膵疾患における US/EUS 診断・治療の最前線】胆膵疾患における EUS-FNA 診断　スコープ，穿刺針の改良も含めて．胆と膵 2009；30(7)：731-7.

8）北野正剛（大分大学），田尻久雄．【NOTES（経管腔的内視鏡手術）体表面に創を作らない新しい低侵襲手術】世界の現状とわが国の基礎・臨床研究への取組み．医のあゆみ 2009；230(12)：1035-9.

9）広浜浩司，相原弘之，猿田雅之，有廣誠二，荒川廣志，斎藤彰一，鈴木武志，加藤智弘，田尻久雄．当院における小腸の内視鏡診断と治療の実際－カプセル内視鏡を含めて．消化器医 2009；7：25-30.

10）西野博一，瀬嵐康之．【膵臓病　最近の進歩】膵画像診断の進歩　CT，MRI，PET を中心に．成人病と生活習慣病 2010；40(1)：30-4.

Ⅲ．学会発表

1）小林雅邦，二上敏樹，久保恭仁，百瀬邦雄，木村貴純，石黒晴哉，吉澤　海，安部宏，須藤　訓，相澤良夫，田尻久雄．多量の消化管出血により外科的治療を要した赤痢アメーバ症の 1 例．第 307 回日本消化器病学会関東支部例会．東京，12 月．

2）石黒晴哉，小林雅邦，久保恭仁，百瀬邦雄，木村貴純，吉澤　海，二上敏樹，安部　宏，須藤　訓，相澤良夫，田尻久雄．男性型脱毛症用薬フィナステリド錠により重症肝障害と遷延性黄疸を来した薬剤性肝障害の 1 例．第 306 回日本消化器病学会関東支部例会．東京，9 月．

3）久保恭仁，北原拓也，吉澤　海，会澤亮一，安部　宏，相澤良夫．PegIFN＋Rib 治療に低反応の G1b 高ウイルス量症例に対する PegIFN 増量療法の有用性．第 17 回 DDW-JAPAN（第 13 回日本肝臓学会大会）．京都，10 月．

4）吉澤　海，安部　宏，相澤良夫．HCV 陽性肝細胞癌における末梢血および肝癌組織内の制御性 T 細胞の増加と病態との関連．第 17 回 DDW-JAPAN（第 13 回日本肝臓学会大会）．京都，10 月．

5）石黒晴哉，久保恭仁，北原拓也，吉澤　海，安部　宏，相澤良夫．肝細胞癌組織内および癌周辺肝組織における FoxP 3 陽性細胞の局在に関する検討．第 17 回 DDW-JAPAN（第 13 回日本肝臓学会大会）．京都，10 月．

6）島田紀朋[1)]，井家麻紀子[1)]，野村直人[1)]，戸田剛太郎[1)]（[1]新松戸中央総合病院），吉澤　海，安部　宏，相澤良夫．Genotype 1b の C 型慢性肝炎に対する Peg-IFN/Ribavirin 併用療法の早期ウイルス学的反応から見た宿主とウイルスの interaction．第 17 回 DDW-JAPAN（第 13 回日本肝臓学会大会）．京都，10 月．

7）島田紀朋[1)]，吉澤　海，井家麻紀子[1)]，安部　宏，土橋　昭[1)]，外山靖展[1)]，野村直人[1)]，相澤良夫，戸田剛太郎[1)]（[1]新松戸中央総合病院）．Peg-IFN/Ribavi-

rin 併用療法の治療効果に及ぼす脂質代謝因子の検討－特に治療前血清アポ蛋白 B 値の効果予測因子としての有用性について．第 17 回 DDW-JAPAN（第 13 回日本肝臓学会大会）．京都，10 月．

8）安部　宏，吉澤　海，土橋　昭[1)]，井家麻紀子[1)]，野村直人[1)]，島田紀朋[1)]（[1]新松戸中央総合病院），相澤良夫．B 型慢性肝疾患に対する核酸アナログ療法の治療成績と有用性．第 17 回 DDW-JAPAN（第 13 回日本肝臓学会大会）．京都，10 月．

9）石黒晴哉，奥憲　彰，吉澤　海，久保恭仁，木村貴純，二上敏樹，安部　宏，須藤訓，相澤良夫，田尻久雄．1 型糖尿病に自己免疫性肝炎を合併した 1 例．第 306 回日本消化器病学会関東支部例会．東京，9 月．

10）斉藤恵介，久保恭仁，奥憲　彰，木村貴純，石黒晴哉，二上敏樹，吉澤　海，安部　宏，須藤　訓，相澤良夫，田尻久雄．肝癌発症を契機に確定診断された AMA 陽性自己免疫性肝炎の 1 例．第 305 回日本消化器病学会関東支部例会．宇都宮，7 月．

11）吉澤　海，安部　宏，木村貴純，久保恭仁，相澤良夫．外傷を契機に，肝細胞癌（HCC）の治療後に出現した肝動脈瘤が胆道内穿破し，閉塞性黄疸を来した 1 例．第 45 回日本肝癌研究会．福岡，7 月．

12）笹沼宏年，久保恭仁，奥憲　彰，木村貴純，北原拓也，吉澤　海，会澤亮一，安部　宏，松岡美佳，相澤良夫，田尻久雄．肝細胞癌切除後に血中 HCV-RNA が持続陰転化した C 型肝硬変の 1 例．第 304 回日本消化器病学会関東支部例会．東京，5 月．

13）井家麻紀子[1)]，島田紀朋[1)]，吉澤　海，土橋　昭[1)]，外山靖展[1)]（[1]新松戸中央総合病院），安部　宏，相澤良夫．Genotype 1b の C 型慢性肝炎に対する Peg-IFN α-2a/Ribavirin 併用療法と Peg-IFN α-2b/Ribavirin 併用療法の早期ウイルス学的反応の検討．第 45 回日本肝臓学会総会．神戸，6 月．

14）北原拓也，久保恭仁，吉澤　海，会澤亮一，安部　宏，松岡美佳，相澤良夫．自己免疫性肝炎（AIH）における肝組織内 IgG および IgG4 陽性形質細胞浸潤の意義．第 45 回日本肝臓学会総会．神戸，6 月．

15）久保恭仁，北原拓也，吉澤　海，会澤亮一，安部　宏，島田紀朋（新松戸中央総合病院），松岡美佳，相澤良夫．慢性 C 型肝炎（CHC）に対する抗ウイルス療法施行時の CD4，CD8 陽性 T 細胞亜分画の変動．第 45 回日本肝臓学会総会．神戸，6 月．

16）吉澤　海，島田紀朋[1)]，外山靖展[1)]，井家麻紀子[1)]，久保恭仁，安部　宏，野村直人[1)]（[1]新松戸中央総合病院），相澤良夫．HCV genotype 1b 感染と脂質代謝との interaction に関する検討．第 45 回日本肝臓学会総会．神戸，6 月．

17）安部　宏，吉澤　海，北原拓也，奥憲　彰，木村貴純，久保恭仁，会澤亮一，松岡美佳，相澤良夫．進行肝細胞癌（HCC）に対する動注用 Cisplatin（商品名：アイエーコール）を用いた動注化学療法の効果および有害事象の検討．第 45 回日本肝臓学会総会．神戸，6 月．

18）北原拓也，木村貴純，久保恭仁，吉澤　海，安部　宏，会澤亮一，松岡美佳，相澤良夫，田尻久雄．肝実質内での CK7 および CK19 発現細胞の解析－慢性 C 型肝炎および原発性胆汁性肝硬変での異同に関する検討．第 95 回日本消化器病学会総会．札幌，5 月．

19）吉澤　海，島田紀朋[1)]，土橋　昭[1)]，外山靖展[1)]，井家麻紀子[1)]，久保恭仁，北原拓也，安部　宏，会澤亮一，野村直人[1)]（[1]新松戸中央総合病院），松岡美佳，相澤良夫．PegIFN α 2b・リバビリン併用療法における脂質代謝因子と早期治療効果の関連性に関する prospective study　血中アポリポプロテイン B 濃度は LDL コレステロールより早期治療効果に関連する．第 95 回日本消化器病学会総会．札幌，5 月．

20）伊坪真理子．肝がんを治そう（内科の視点）．平成 21 年度日本肝臓学会　肝がん撲滅　伊東市民公開講座．伊東，6 月．

Ⅳ．著　　書

1）Kiesslichi R, Tajiri H. 3. Advanced imaging in endoscopy. In : Classen M, Tytgat GNJ, Lightdale CJ. Gastroenterological Endoscopy. 2nd ed. Stuttgart : Thieme, 2010. p.21-35.

2）Matsuda K, Tajiri H. 20. Tissue and Fluid Sampling. In : Classen M, Tytgat GNJ, Lightdale CJ. Gastroenterological Endoscopy. 2nd ed. Stuttgart : Thieme, p.203- 8

3）炭山和毅，田尻久雄．第 3 章　ESD の実際と基本手技～コツとピットフォール　4．スコープの種類・機能・選択．小野裕之編．症例で身につける消化器内視鏡シリーズ：食道・胃 ESD：IT ナイフによる ESD の実際．東京：羊土社，2009．p.67-9.

4）豊泉博史，田尻久雄．第 5 章　Case Study（Q & A，問題と解説）3）胃　3．拡大内視鏡－呈示例．田尻久雄，小山恒男編．症例で身につける消化器内視鏡シリーズ：食道・胃・十二指腸診断．東京：羊土社，2009．p.309-27.

5）今津博雄，田尻久雄．Ⅰ．総論［総説］胆膵内視鏡教育．中島正継監修，安田健治朗編．胆膵内視鏡診療の実際：標準的検査法と手技のコツ．東京：日本メディカルセンター，2009．p.45-55.

Ⅴ．そ の 他

1）須藤　訓，岩久 章，板垣宗徳，石黒晴哉，瀬嵐康之，小池和彦，穂苅厚史，石川智久，高木一郎，伊坪真理子，田尻久雄．CDDP 肝動注化学療法が著効した肝細

胞癌の1例．肝臓 2010；51(1)：21-7.
2）木下晃吉，板垣宗徳，青木孝彦，松平　浩，石黒晴哉，二上敏樹，上竹慎一郎，瀧川真吾，瀬嵐康之，小池和彦，穂苅厚史，石川智久，高橋宏樹，銭谷幹男，田尻久雄，尾高真．肝移植後，再発性C型肝炎に対するinterferon，ribavirin加療中に，肺，縦隔リンパ節結核を発症した1例．肝臓 2009；50(9)：520-6.
3）会澤亮一，高倉一樹，久保恭仁，吉澤　海，北原拓也，安部　宏，松岡美佳，相澤良夫，田尻久雄．carboplatin（CBDCA），etoposide（VP-16）による化学療法と放射線療法の併用が奏効した原発性食道小細胞癌の1例．日消誌 2009；106(9)：1334-42.
4）板垣宗徳，加藤智弘，有廣誠二，田尻久雄．【消化器診療　示唆に富む症例】小腸病変を伴う潰瘍性大腸炎の1症例．消臨 2009；12(4)：397-8.
5）二上敏樹，貞岡俊一，中尾　裕，高木一郎，田尻久雄．Percutaneous transluminal angioplasty（PTA）が奏功したIV型Budd-Chiari症候群の1例．日消誌 2009；106(8)：1202-11.

神　経　内　科

教　授：持尾聰一郎　　自律神経
准教授：岡　　尚省　　自律神経
准教授：栗田　　正　　神経生理
講　師：松井　和隆　　脳血管障害
講　師：鈴木　正彦　　神経核医学

教育・研究概要

Ⅰ．変性疾患

1．Parkinson病（PD）における性機能低下に関する検討

PDではしばしば性欲減退がみられ，うつ状態や自律神経障害と関連があるとされている。PD患者52名でBDI-Ⅱ（Beck Depression Inventory Second Edition）を用いて抑うつの程度を調べ，性欲減退の項目との関係をみた。さらに心電図R-R間隔変動係数を用いて自律神経機能と性欲減退との関係をみた。

2．PDの嗅覚障害に関する検討

PDの非運動症状の一つとして嗅覚障害が注目されており，PDの早期診断に有用とされている。PDの剖検脳を用いたこれまでの研究で，PDでは病期が進行すると肉眼的にも嗅球が萎縮することを発表した。PD患者の嗅球の体積を頭部MRIで測定し，各病期における嗅覚テストの結果と比較検討した。

3．PDの易疲労性に関する検討

PD患者81名でParkinson Fatigue Scale（PFS-16），Mini-Mental State Examination（MMSE），Unified Parkinson's Disease Rating Scale（UPDRS），Parkinson's Disease Sleep Scale（PDSS），Parkinson's Disease Questionnaire-39（PDQ-39），Beck Depression Inventory（BDI-Ⅱ），[^{123}I] MIBG心筋シンチグラフィーを評価した。PDの易疲労性への影響因子を検討するため，PFS-16とその他の因子の関連について重回帰分析を行った。

4．神経変性疾患の自律神経機能障害の検討

心臓交感神経機能を反映する[^{123}I] MIBG心筋シンチグラフィーと血行力学的自律神経機能検査法であるValsalva試験によりPDの心血管系自律神経機能障害の研究を行った。起立性低血圧のない未治療の初期から[^{123}I] MIBG心筋シンチグラフィーで異常を示し，また心血管系の自律神経機能障害も認めることを明らかにした。また，PDの嗅覚障害について，嗅覚検査法（OSIT-J）を用いて評価し，他の自律神経機能障害との関連について検討した。